

子どものための哲学教育を介した 道徳教育プログラムの開発プロジェクト

宇佐美公生・室井麗子・大森史博・板垣健

(平成 27 年 3 月 6 日受理)

岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業
教育実践研究論文集 第 2 巻 2015 抜刷

子どものための哲学教育を介した道徳教育プログラムの開発プロジェクト

宇佐美公生*, 室井麗子*, 大森史博**, 板垣健***

*岩手大学教育学部, **岩手大学教育学研究科, ***岩手大学教育学部附属小学校

(平成27年3月6日受理)

1. はじめに

本プロジェクトは、M・リップマンにより開発された「子どものための哲学」の流れを汲み、世界中に拡がりつつある「対話を通して思考力を深める教育プログラム」としての哲学教育の試みを、「道徳教育」の場面に応用し、生徒たちが主体的に道徳的課題を設定し、考え、対話し、協力して答えを探求するための新たな教育プログラムを開発することを目的として企画されたものである。

2. プロジェクト立ち上げの背景

1970年代にリップマンが提唱した「子どものための哲学」の試みは、その後 Montclair State University の Institute for the advancement of philosophy for children (IAPC)¹を中心に、欧米やアジア、中東などの小、中、高校における「哲学対話教育」として広まり、ユネスコが「哲学のためのパリ宣言」(1995年)、「哲学についてのユネスコ間域戦略」(2003年)を掲げ、子どもの哲学教育推進に乗り出して以降は、「コミュニケーション力と思考力を深める教育プログラム」の一つとして注目され、世界各国で実施されてきている。

「問いを立て、考え、対話する」ことを通し、互いに他者の意見を尊重しながら協働して問題を探求する哲学対話の実践は、「批判的思考」(Critical thinking)はもとより、「創造的思考」、「ケア的思考」など現代社会において必要とされる能力を訓練する場となりうるだけでなく、人間として意義ある人生を生きてゆくためにも有意義な活動である。ただしここで言う哲学とは、現実経験を支える概念や人間の有り様、我々の思考の

枠組みについて考える活動を指しており、けっして哲学の専門的知識を要求するものではない。むしろ子どものための哲学の実践において大切なのは、「哲学的に思考し対話するための方法や構え」を学ぶことであり、それは「自律的な思考の発達のための足場を与える」という意味で、教育そのものの目的とも重なり合うものである。その意味では、哲学対話教育は様々な教科の領域で活用可能なものであるが、本プロジェクトで特に「道徳教育」に適用しようとしたことには、いわゆる「道徳の教科化」を巡る近年の状況がある。

文科省では2014年10月の中央教育審議会の答申を受けて、学習指導要領の改訂を経て、早ければ2018年から「特別の教科道徳」の導入を目指しているとのことである。道徳の教科化自体、特定の価値観の押しつけにつながるのか、評価はどのように行うのか等の問題があつて、別途検討すべきことではある。しかし仮に教科化されることになったとしても、その状況で道徳教育に活用可能な新たな教育プログラムを開発することが、教員の間広がっている不安や懸念を解消するのに役立つのではないかと考えたことが、本プロジェクトのもう一つの背景である。

ところで中教審答申に先立ち、文科省の下で組織された「道徳教育の充実に関する懇談会」の報告書「今後の道徳教育の改善・充実方策について(報告)」(以下「懇談会報告」)では、「歴史的経緯に影響され、道徳教育そのものを忌避しがちな風潮」や「道徳教育の目指す理念が関係者に共有されていない」、「道徳性の育成と道徳的実践力の関係が理解されていない」、「他教科の指導に比べて軽んじられ、道徳の時間が、実際には

他の教科に振り替えられている」などの道徳教育をめぐる課題を挙げつつも、「今後の社会における道徳教育の重要性」として次の様な点を指摘していた²。すなわち、グローバル化や情報化の進展、少子高齢化、自然災害の発生など「与えられた正解のない社会状況に対応しながら一人一人が自らの価値観を形成し、人生を充実させるとともに、国家・社会の持続可能な発展を実現していくことが求められている。そのために絶え間なく生じる新たな課題に向き合い、自分の頭でしっかりと考え、また他者と協働しながら、より良い解決策を生み出していく力が不可欠である」、と。しかもその一方で「我が国の児童生徒については、身につけた知識を生かして自ら考える力や学ぶ意欲に課題がみられること」や「多くの若者が他者とのコミュニケーションや対人関係」で課題を抱えていることが指摘されている。

「懇談会報告」では、このような課題も含め、いじめ問題などの諸課題に応えるために道徳教育の改善策が提示されているわけだが、少なくとも上で引用した課題に対しては、「思考力と対話力」の育成を目指す本プロジェクトの「哲学教育」もまた一定の役割を果たしうるものと考えられる。また同様に「哲学教育」は「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質であると考えられる³と語る中央教育審議会の「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（2014.10.21）に応える方途として位置づけることもできよう。

3. プロジェクトの実実施計画と経過

さて、道徳教育に期待される資質の育成のために「子どもの哲学教育」の様々な方法をどのように活用すればよいかを考案することが本プロジェクトの当面の課題であり、そのために「哲学教育の手法」を検討しながら、それを道徳教育に持ち込むにあたっての意義と課題を検討する。そして授業のねらいの設定、授業の方法、評価のあり方などの検討を経て、いくつかの授業案を構想し、

附属小学校の高学年のクラスでの板垣による授業実践を行う。最終的に実践を振り返り、そこでの課題を検証しながら「哲学対話教育」のプログラムを道徳教育の中にどのように位置づけるべきかを再検討するという計画を立てた。なお短期的見通しは以上のようなものであるが、この研究を通して、我々としては以下に掲げる波及的な成果を見込んでいた。

- 1) 子どもたちの日常的な問いからはじめ、勝ち負けを争うディベートではなく、対話を通して多様な価値観や考え方を認めあえる安全な探求のコミュニティを形成するための方法を確立する。
- 2) 小学校の「道徳」の担当者と協力して、道徳の授業で取り上げる資料のあり方を研究し、最終的には「いじめ」の問題のような生徒たち自身の課題を自らの力で考え解決できるような「思考環境」を整えられる。
- 3) これまでの心情中心主義的な手法とは異なる、新たな道徳教育の方法を開発する。
- 4) 道徳以外の各教科にも哲学対話を応用し、セーフティな「探求のコミュニティ」としての学級づくりに寄与する。

実際の研究は、メンバーの専門分野の違いをふまえて、最低限の共通理解を共有するところから始められた。まず、ちょうど邦訳が出版されたところだったM・リップマンの『探求の共同体』⁴を手がかりに「子どもの哲学教育」で意図されている教育の趣旨を学習した。そして哲学教育の遂行には、できるだけ子どもに身近な日常的な問いからはじめ、どんな意見もきちんと聴取され、異なる価値観や考え方を認め合った上で、対話を通して意見を交換でき、誰も否定されることのないセーフティな「探求のコミュニティ」の形成への配慮が重要であることを確認した。数回にわたる会合において、こどもの哲学、哲学対話などに関する参考文献を活用した授業方法の研究、実践例についての情報交換に加えて、哲学対話に適した読み物・素材の検討などを行った。探求の共同体を

実現するための具体的手法や「問い」や「思考」を促す素材、「哲学教育」の授業案や実践方法の構想については、「子どものための哲学教育研究所」による先行研究⁵や河野哲也氏の『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』⁶で紹介された方法を参考にすることができた。

哲学対話を実施するにあたって、素材の選別、設問の仕方、教師の役割など、対話の諸要素をめぐって担当者間の意見交換を行った後、10月からはメンバーが各々担当する教育の場を活用して、哲学対話教育及び道徳教育に関わる諸要素について試行・検討を重ねた。

室井は、「教職実践演習」において、『学習指導要領』の道徳の内容項目について子どもたち自身が問い思考する哲学対話型の授業案を受講生に構想してもらい、それを互いに実践するという試みを行った。受講生は、①子どもの哲学教育の実践映像を見て授業のイメージを掴んだ後、②森田伸子『子どもと哲学を一問いから希望へ』⁷の精読を通して哲学対話型教育の理論的ポイント（「“哲学を教える”から“哲学することを教える”へ」）、「哲学する場としての探求の共同体」、「従来の道徳教育との違い」等）を押さえた上で、③上述の河野の著作で紹介されている方法論をもとに授業案を構想し模擬授業を行った。

模擬授業で選ばれた「相手を思いやる」等の内容項目は、あらかじめ設定された着地点ではなく、むしろ問うべき対象であるという自覚のもと、受講生は、従来の道徳授業との違いを意識しながら哲学対話型授業を構想・実践できていたように思われる。しかし、ある程度テーマとなる徳目が想定された物語を素材にしつつ、自由な発想を許す哲学対話を促進するという教師の役割の難しさ、物語の構造に制約された探求の困難さ等が、参加者の感想として確認された。ここから導出される今後の課題の一つとして、哲学対話型授業のための教材研究の重要性が挙げられる。従来の道徳教育の教材のように規範を補強・強化するものではなく、子どもたちの問いや対話を活性化し、かつ、その「羅針盤」となり得るような教材を、いかに

提供しうるか。ファシリテーターとしての教師に求められる重要な課題である。

大森は、大学院のオムニバス授業（2014年度「社会科教育内容特論B（公民系）」）において、「子どもの問いと哲学の思考」と題する哲学対話の授業をおこなった。「大人になるとはどういうことか」、「幸せとはなんだろうか」といった素朴ではあるが根本的な主題に向き合うことによって、留学生をはじめ初学者には近づき難いと思われがちな哲学の垣根を下ろし、その核心に具体的な仕方と触れ、考えることの面白さをじっさいに感じてもらおうことが目的である。概要は以下のとおりである。①参加する大学院生には、野矢茂樹編著『子どもの難問』（中央公論社刊、2013年）を参考にして、自分が考えてみたいテーマを選択し「問い」を設定する。②選択したテーマを軸にして、子どもに答えるかのように、真剣かつ率直にその「問い」に答えを与える。③その答えに他の出席者は満足できるか、自分自身が満足できる答えを提出できたのか、納得できない点はなにかを相互に質疑応答する。④答えと問いをめぐり対話をかさねる授業をとおして、問いの設定の仕方と問いへアプローチの仕方を検討し、哲学対話における教師の役割を考察する。

「大人（教員）はこれまで、子どもの問いに真剣に答えてきたのだろうか」。この疑問を共有する参加者にとって、問いかつ答えるという対話による共同の探求の仕方は好評であり、授業への取り組みは真剣そのものであった。対話のプロセスを振り返ることによって確認することができたのは、答えを求める途上での何らかの気づきであり、そのとき自らの「問い」そのものが、求められている答えに応じて変容しているという事態である。この点について考察を深めることは、哲学対話におけるファシリテーター（教員）の役割を検討する上できわめて興味深いものとなった。

宇佐美は、「社会科授業実践研究」における学生のグループ活動として、「地歴」「公民」など社会科の各分野に関わる哲学的問いを学生自身の話し合いで設定してもらい、その問いを巡って対

話による探求を重ねるワークショップを行ってもらった。発言の意味を確認しながら、その根拠や理由を尋ねていく対話的探求そのものは、おおむね肯定的に受け入れられたが、テキストなどの資料がない中で共通の哲学的問いを立ち上げることが、慣れていない学生には難しいことであった。

4. 道徳の時間の哲学対話実践

以上の検討の成果を持ち寄って検討を重ねた後、2014年12月18日に付属小学校の5年生35名を対象に板垣が、哲学対話の形式で「道徳」の授業(1コマ45分)を以下のような形で実践した。

まず児童には事前に対話の心構え(ゆっくり話す、最後まで聞く、自分を反省するなど)を説明しておいた上で、最初に、アイスブレイクを兼ねて生徒たちが互いに、好きな色は何か、好きな教科は何か、その理由は何かとといった質問の練習をし、自由に意見を述べあえる雰囲気を作った。

次に、教師が作成した「犬の大量遺棄」をめぐるテキスト(2014年秋に栃木県などで起きた大量の犬の遺棄事件と、その背景にあるペットの処遇を巡る法律の改正と殺処分の話)を読んで、互いに感想を述べあいながら、みんなで一緒に考えたい問題を出し合った。児童からは「どうしたら殺処分をなくせるか」「なぜ日本は殺処分をするようになったのか。外国ではどうしているか」「同じ生き物をお金で考えるのはいいのか」などの問いが出されたが、協議の末に「人間と犬の命は平等か?」という問いを立ち上げた。

次にその問いをめぐり、5名程度の小グループに分かれて対話的探求を行い、その後、クラス全体でコミュニティーボールを使いながら対話を行った。対話の場には教師も加わり、時に、意見への理由を問うたり、意見を整理する役割を担った。その際、発言に対し「理由」、「具体例」、「意味の明確化」などを重ねて問いあうことで、簡単に結論を導くのではなく、考えを深めていくような指導が為された。最後に、対話について振り返ってもらった上で、自分でどれだけ考えられたか、他人の意見をよく聞くことができたか、自分の考

えを自省的に深められたか、などの自己評価を行い、対話型の探求についての感想を記入して終了した。以下は授業の様子と板垣による学習指導案である。



第5学年 こども哲学(道徳)学習指導案			
		日時 平成26年12月18日(水)5校時 児童 5年うめ組35名 場所 3Fホール	
1 ねらい			
<ul style="list-style-type: none"> 具体的な事例をもとに、みんなで考えてみたいテーマを設定する力を養う。 哲学的な問い(テーマ)をもとに対話することを通して、共に協力して考えようとする態度を育てる。 			
2 本時の展開			
児童の活動	教師(ファシリテーター)の役割	留意事項	
導入 1 テキスト(事例)を読む。 ・興味をもったことや、疑問に思ったことを覚えておく。	・教師が一度読んで、各自で黙読するように指示をする。	・対話の心構えについては、事前の説明しておく。 ・テキストは、犬の大量遺棄をもとに教師が作成したものを使用する。	
10分 2 感想を発表し合う。 3 みんなで考えたい問いを出し合い、問いを定める。	・何でも自由に述べ合うことができるような雰囲気をつくる。 ・児童が出した問いを教席に位置付ける。	・児童が考えたい問いを大切にし、教師からは押しつけない。	
予想される問い 「人間は特別な生き物なのか」「悪いことは何なのか」			
展開 25分 (1) 小グループでの対話を行う。 ・問いについて自分の考えを発言した児童に質問する。 (2) クラス全体での対話を行う。 ・問いについて自分の考えを発言した児童に質問する。	・質問の出し方を大切にさせる。 ・結論を出すのではなく、出された考えに質問を続けていくことを大切にさせる。 ・コミュニティーボールの使い方を説明する。 ・全員回答、追いつけ質問、悪魔の赤蓮人、代案の提案など、対話を促進する役割を担う。	・質問の出し方として、「意味の明確化」「理由」「証拠」を例示する。 ・問いが問いに結びつこうように配慮する。 ・思考時間を保証するなど、ゆとりと進行する。 ・教師も対話に参加する姿勢を大切にさせる。	
終末 10分 5 対話についての振り返りをする。 6 自己評価を行う。 7 感想を記入する。	・自己評価に関する質問をし、児童が一斉に答えるようにする。 ・ワークシートを配付し、自由に感想を書かせる。	・対話そのものに関する振り返りの視点を示し、発表させる。	

板垣は、この授業に先立ち6年生を対象にした哲学対話の授業も行っていたが、限られた時間で児童自らが質の高い「問い」へ至るよう導くことの難しさを指摘していた。また小グループでの対話の様子からは、道徳的徳目や規範から自らの思考を解き放つことの難しさも看取できた。しかしその一方で、命はみな平等であるという理念と、人間と犬の扱いの違いの事実との間で矛盾がある

ことに気づいた上で、どのように考えるべきかに思い悩む児童も見られた。短い時間の対話的探求ではあったが、お互いの意見に耳を傾けながら、最初の問いの意味を考え直す中で、既存の規範や価値の矛盾に悩んだり、それらを更なる高みから反省的に検討しようとするような思索の動きが見られたことは、非常に印象的であった。

子どもたちの感想から

- ・人間は病気になっても殺さないのに犬は病気になると殺すのがびょうどうじゃないと思いました。
- ・犬をすてた人は「犬だからいい」という考えが強い人じゃないかと思いました。それが人間だったらこわいと思いました。哲学は楽しかったです。
- ・私はそうきさんが言った自然に放すということは、しがいが増えると思うし、犬がいろいろな物を食べると亡くなるかくりつも増えるので、もっと深く話したいと思いました。
- ・人間と犬の命は平等かというテーマでみんなで話し合ってみて、人間と動物の命はぼくは不平等でもいいと考えました。なぜなら人間と動物の命が平等だったら人間も殺処分されるということになるからです。
- ・私は意見を1回しか言えなかったのですが、この時間はたくさんいろいろなことを考えられたのでよかったです。今日の時間はとつてもたのしかったのでまたいつかやりたいです。
- ・犬が病気になって殺処分されているなら人間がされてもいいと思うので人間がダメなら犬もダメだと思いました。今日はみんなせっきよくてきにはなせていてよかったです。
- ・人間が人間を殺してしまうと重いつみなのに人間が動物を殺してもつみがないのかというのが同じ命の価値なのに不思議でした。

4. プロジェクトの成果と考察

期間内に実施できた授業実践は少なかったが、道徳の授業に哲学対話形式の思考と探求の場を設ける方法とその試みの有意義さは、学生や児童の感想からも確認できた。ただし、児童生徒が主体

的に考えられる力を育成し、協働して探求する場を保障した上で、哲学対話教育の一般の教員への普及を図るためには、じっくり他人の発言に耳を傾けゆっくり考えるための十分な時間の確保、探究の素材となる資料の精選、さらに児童生徒の自主的探究を促す教師のファシリテーション技術修練ための機会の確保などが必要であることが改めて確認された。

簡単に答えの出ない問題や、一見したところ異なるように見える二者の前に立ち止まり、みんなと協働して答えを探求したり、違うものの連関を考えるという学びは、今回とりあげた道徳教育だけに限らず他の教科でも応用可能である。そしてそのような哲学対話的探求の経験は、自分と違う考えを簡単に拒絶したり遮断するのではなく、他者の意見に耳を傾け、その理由を考えたり共有できる前提を探り合うことで、異質な考えに対する寛容さ、和解や妥協の可能性を模索する姿勢の訓練の場になりうる。その意味で広義の道徳的能力（ケア的思考力とコミュニケーション能力）の育成にもつながると考えられる。

しかしその一方で、そのような哲学教育は、共感能力や道徳的心情の育成や徳目の修得を目指した従来の道徳教育の方法とぶつかり合う可能性も孕んでいる。哲学対話による道徳的課題の探求と従来の徳育との間の関係を、教育学的、哲学的視点から考察し、道徳教育全体の中に哲学対話教育をどのように位置づけるべきかは、今後の研究の課題である。

以上が、本プロジェクトの成果と課題であるが、最後に担当者を代表して大森による考察と提言を記してして本稿を締めくくることにする。

.....

附属小学校での哲学対話の実践において、児童らは自分が注目する事象を掘り下げ、より広い連関において問題を把握し、多様な視点や異なる視点を考慮しようとしていたこと、そして、このような哲学対話による探求を楽しみながら行っていたことは、このプロジェクトをとおして確認された大きな成果である。その一方で、出された考え

に質問をつづけ、問いが問いに結びつくように配慮する、といった教師（ファシリテーター）の役割と目標の重要性や難しさにもあらためて気づかされた。出された考えに問いを提起し、さらにそれを踏まえて問いを提起するためには、ゆっくりとした思考の時間を確保する必要があるが、全体として45分の授業のなかに、導入、展開、終末をおさめることは、熟練の教師にこそできる至難の技であろう。沈黙のうちに動く思考が言葉になるのを待つ時間を確保しなければならない。

さらに、資料の読解を踏まえてそれぞれの児童が提起した疑問から、全体で話し合うテーマを抽出して「問い」の形に仕上げる段階については課題が残されている。具体的には、「人間と犬の関係」、「命」、「生き物の価値」というテーマが抽出され、「人間と犬（動物）の命は平等か？」という問いが設定されることになった。このプロセスをすべて児童に委ねることは、哲学対話の形式に慣れないうちはきわめて難しいにちがいない。だが、すぐれた問いを提起することに哲学的思考の大きな意義をみとめるとするならば、どのように問いを仕上げ、いかにして思考の発展を促していくのが問題であろう。

この問題に対処する一つの考え方として、リップマンが「探求の共同体」の構築を哲学対話の一つの目標としている点に手がかりを求めることができる。おそらく、大人が真剣に問いかつ答えようとしなければ、子どもが真剣に答えを求め、探求をつづけることはできないだろう。もちろん大人が何らかの答えを示す場合であっても、「価値観の押し付け」といった道徳教育に対する懸念は、いうまでもなく払拭されなければならない。それでも、「無関与の観察者」に徹することが必要なのではない。大人（教員）もまた、その対話の場で提起された「問い」を子どもとともに引き受けることこそが、協同的な探求者として哲学対話の場に関わるということにほかならない。この探求の過程そのものを、他者とともに同じ世界と事象とを見つめる関わり、人間と世界との間にある関

わり、自己と他者との間にある関わりを包括する「問いかけ」の関係と呼ぶことができよう⁸。

そこには、問いの答えをもとめながらその問いの意味そのものを考え、自明と思われる事柄についてもあらためて問いなおす、高度な反省的思考が要求されるであろう。こうした哲学対話の実践を充実させ、道徳および他の教科においても子ども自身が問いを提起して対話をすすめることができる場を構築するためには、教室を運営しファシリテーターの役割を担う教員に、一程度の訓練と習熟が不可欠である。教員養成過程における哲学、倫理学、道徳教育に係る諸分野の、さらなる充実と連携が期待される。

¹<http://www.montclair.edu/cehs/academics/centers-and-institutes/iapc/>

²「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）—新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために—」道徳教育の充実に関する懇談会、平成25年12月26日、3頁。なお、下線は引用者による。

³「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」、中央教育審議会、平成26年10月21日、3頁。なお、下線は引用者による。

⁴ マシュー・リップマン『探求の共同体：考えるための教室』、玉川大学出版部、2014年

⁵http://www.geocities.jp/philosophical_education/column.html

⁶ 河野哲也『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』、河出ブックス、2014年

⁷ 森田伸子『子どもと哲学を一問いから希望へ』、勁草書房、2011年。同書は、子どもたちの言葉を、様々な哲学者の哲学から吟味し、それらの言葉を哲学へと深化させていく契機を探求し、そうして子どもたちの問いを生への希望へと開いていく道を模索するものである。

⁸この観点については『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第14号、2015年に掲載の拙論（大森）を参照されたい。